99分枝 branching 06

http://branching.jp

ブランチング 01 発刊 2013 年 12 月 9 日
ブランチング 05 発刊 2014 年 3月 9 日
ブランチング 06 発刊 2014 年 6月 9 日
入稿先 system@baikakken.com

朝

Tomoro KAWAI 1976～
川合朋郎

洞窟を出ると決めた人／老婆
ミクストメディア／タイル 10×10 cm

蟬は飛び立ちざまに小便をする。闇雲に飛んでぶつかった物にしがみつく。しがみつくと同時に咀しく喝き始める。さよう初めて蟬になりたいと思った。地上に出て咀く喝けさ蟬は酷が良い。しばらくすると地面にカサカサ転がってしまうけれど。やり切った証である。

アルミニウム鉄が好きだ。重くて扱けるから好きだ。軽くて扱けないアルミはつまらない。

川合朋郎 Tomoro Kawai 1976 年 大阪生まれ
静岡県三島市在住 画家
東京藝術大学大学院修了
tomorokawai.com
2013 年 7 月アリコ・ルージュトポス本 （川合朋郎展）
TOPOS Highland Haricot Rouge 2013
長野県須坂市臨空「アリコ・ルージュ」
長野県長瀬町川上 2755 長瀬美術館 長瀬高原ゴルフコース前
phone 026-253-7551
営業時間 12 時 –20 時 30 分
休館・定休日 火曜
http://homepage3.nifty.com/haricot/
http://toposnet.com

女体

Nami GOTO 1969～
ごとうなみ

陣痛波をやりすごす身体の感覚
それはどんどんこの腹が
自身を遠かに超えた宇宙の星の誕感になり
皮がもう１ミリも膨れようなら
風船のように破裂すると
この腹が破けてしまう！と本気で思えるほどの緊張感と
それがまるで嘘のように消えていく脱力感を繰り返す

私の身体は女体だった
他界へと誘う女の性は
そのおおらかな行為で己を空っぽにする

体外へ生み出されたものは
命なら受け継がれ
糞なら活かされる

腹を丸ごって己の女体を活かしてみせると
彼女は私に伝えた

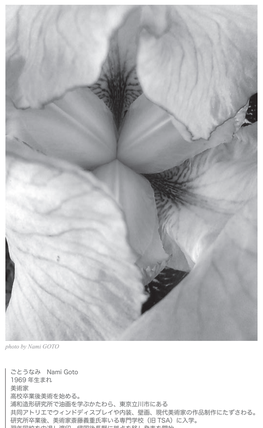


photo by Nami GOTO

ごとうなみ Nami Goto
1969 年生まれ
美術家
高校卒業後美術を始める。
清和造形研究所で油画を学ぶかたわら、東京立川市にある
共同アトリエでフィンドオブジェレイやウ絵、壁画、現代美術家の作品制作にたずさわる。
研究所卒業後、美術家斎藤義重氏率いる専門学校（SITSA）に入学。
翌年同校を中退し渋谷、原宿後長野に拠点を移し発表を開始。
家具、写真、グラフ。インスタレーションなどを表現媒体とし
病内外で個展グループ展多数。

http://nami-goto.jimdo.com
2013 秋トポス都間主観 参画作家

バスマニアによるバス研究　vol.001 長野駅→善光寺大門

Kazuya OSAME 1971～
納和也

参道を走るいすゞ LV218。この車両は戸隠登山用高出力車両。参道を走るバスは行き先によって車両が異なる。戸隠へはワンステップ、ノンステップ車両では乗り降るので運用出来ないのでツーステップ車両が望ましいである。ワンステップ、ノンステップ車両は由内線の主に若槻、平木、善光寺大門での運用になる。エンジンの音もそれぞれ異なる。戸隠線車両は高出力のV8エンジン仕様、観光、高速クラスのスペックである。しかしミッションはトルク重視になっているのでスピード上は由内線のレギュラーサイズエンジンと変わらない。長野駅から善光寺大門までこの車両に乗ってみる。バスを外から眺める事は多くが乗るのは久しぶりである。乗らないとバスそのものの魅力が薄れるのは正直なところである。

昭和通との交差点を超えると道は石畳に。ここから完全歩行者優先の道路になり運転にもさらに細かい配慮が求められる。石畳による揺れをエアサスがしっかりと車両を支える。「ごとん、ごとん」と。発進、停止が多くてもエア一音の音も頻繁になり始める。ミシミシと石畳を揺れながら動く。

善光寺

いすゞ LV218 の後ろ姿。V8 エンジンのトルクの利いた低温がリア部から響き渡る。戸隠登山用の車両は現在、山陽電鐵道から定期的にこのタイプが導入されている。

かるかや堂入口

二個目の停留所、かるかや堂前。昭和通との交差点、もんぜんふらざがありトイーゴも右に見える。この交差点は路線車両に加えて高速車両も走行する。過去事情によりすれ違い、路上駐車車両をよけながら数センチの幅をあけてスリリングな感覚が僕をしびれさせる。

鍋町の交差点

鍋町の交差点。歩行者が多く横断する場所。いすゞ LV218 のフロントガラスは一枚仕様、左右のサイドウインドウから些細な人の動きが見える。道路キュービックと呼ばれる本車両ならではの跳めである。分る人にしかわからない客ガが湧きがある。引き続き幅が狭い参道の為、横断歩道に横断する歩行者が多いので右折、左折する為に停止した乗用車を追い越すのも難しい。始めから複雑な道路環境である。ここを由内、山間部へのからバスが多く運行している。路線によっては全てが狭い道を運行する場合もある。

千石入口

右折後すぐに一個目の停留所、千石入口。千石劇場という映画館、古い喫茶店他製菓の繁華街がある場所である。ここで降りる人はいないが乗り込む人は多い。ここは由内北西、北東へ向かう路線が停まるバス停である。写真の通り狭い二車線の参道、大型バスがぎりぎりの幅で走行し始める。ギアチェンジを小刻みに行い停止、発進を行う。車両後部より聴こえる地を這うような凄いた加速音が心地よい。

長野駅

長野駅よりいすゞ LV218 に乗車。久し振りに乗るバスである。バス独特の匂いが鼻に入って来た。シートの軋った匂いと微かに香るエンジンの匂いである。忘れていた体感が蘇る。ギアの機械音も聴こえる。左側扉前列は前輪の真上である。運転手は前輪より前で運転をする。コックピットが前輪より前とういのは不思議な感覚である。トラックは前輪の上にコックピットがある。現在長野駅はバスロータリーを改修中。なので駅前でのバス撮影を出来ない。完成すると駅前は二階構造となる為にバスは下側に入る予定。なので明くは前のように撮影が少後出来ない。長野バスターミナルで撮影するしかないようだ。駅から延びる道は４車線である。駅発のバスが多くこを通る。まずは駅からチャイムとともに発進する。リアからは力強いトルクフルなエンジン音が耳に響く。

納和也 Kazuya Osame クリエイター
1971 年埼玉県熊谷市（印象深い）生まれ
オフセットカラテイプ企画コーディネーター
マツシロオルタナティブ開発スタッフ
2013 秋 トポス都間主観 出品作家

アルエロ交通模式図　長野支社　長野営業所主任の斎藤勇夫さんに参道区間についてインタビュー

■長野駅から善光寺までの路線について
長野駅から善光寺大門までは一律 150 円です。歩き、ちょっと疲れたら気軽に乗れる、ペットボトルのお茶と同じ価格で快適に過ごせます。この路線は善光寺往復便「ぐんぐす号」をはじめとして若槻地区、平木、戸隠、鬼無里へ向かう路線が集中する区間です。参道での路線のバスの役割として歩行者のアシスト的なものがあります。

■長野駅から善光寺までの路線の現状、参道イベント時でのバスの利用
イベント時は路線部分が歩行者天国となります。その中で気軽に早くたどり着けるバスの走行レーンがない為迂回運行となります。迂回部分から参道への誘導が難しいのが現状です。県外から方が新幹線から降りて徒歩バスに乗ってもは迂回路から参道へスムーズに向かえません。

■高速バスと路線バスの関係
高速バスの流り上げと自治体の助成金によって路線バスの運用費を賄っているのが実情です。助成金は多く利用しているお年寄りとこれからの交通機関である路線バスにとって重要な役割で無くてはならないものです。近年リアーバスでの低価格の高速バスを運行する会社が増えております。それによる競争を強いられる事より肝心の路線バスの運行にまでその余波は及びます。路線バス、高速バスでは快適性、安全性は常に最低限の水準を維持しなければなりません。ツアーバスは短期によりお相見的に消えてしまう可能性があります。専門的に路線を持続するアルエロ交通では先の事も考えての安全な運行を維持しなければなりません。そのためには新型の車両は不可欠なのです。

アート と思考⑤
「10×10」～アートをめぐる学芸会論争史～

Tosaku HATTORI 1976～
服部洋介

レッカードを首巻きされた本田圭佑 *2013 photo by Tosaku HATTORI*

先日、長野市の ARTSPACE FLATFILE において、「Nagano Art File 2013 10×10」が開催された。長野にゆかりのある人たちのグループ展としてと、オーナーのモリヤコージさんの「強制参加でお願いします」という一言で、もも３作品を出品した。新聞報道によると、プロ・アマ混ぜ合わ、大人から子どもまで、500 点近くの作品が集まり、大変な盛況ぶりだったと聞いた。

ところで、出品した作品はどうなったのか？　私は河原に捨てて、手に取に出張 出さない限なので、明日さんとっ 身のまわりのことは何でも気にしなければ関係ないという姿勢な人がいて、私の３作品をとっ 壊れたりしないだろうと思っていたら、見事に全部なくなっていた。私の３作品をとっ 壊れたりしないだろうと思っていたら、見事に全部なくなっていた。

とにしたいうさに奇特な（というか見識の立派な、笑）人がいた事実を Facebook(2) に投稿しなかったらば、そのまま知らずに終わっていたことだろう。そんな経緯もあって、一度、会場に足を運んでみることにした。

さて、会場に着くと、壁一面、びっしりと作品で埋まっており、中にはずいぶんとユニークな作品もあっておどろかされた。ところで、私の作品はどこ？　モリヤさんに尋ねると、「いや、見指定なのでこちらに置いてあります」。見ると、こ「下に枠ごの下に、それも展示してあったのだ。ちゃんと壊れずにすむならいう展示にしてくれるようにと、ご配慮してくださっていたのだ。

ところで、オープン参加の分展にて、「一般公募の展示会にはなるのでは？」と危惧する声もあった。そうしたわけで、私は問題ってもう学芸会では展示されないであろう作品を出品して、今展が「学芸会」的な方向の試金石とした。結果はご覧の通りである。なお、今回は我沢にも各賞が設けられており、その中の一つに「出品協力未就学児賞」があり、実際に池田にいてもら長野北高校（現在の長野高校）在学中に、同様の事件が出来した。当時、石膏デッサン主体だった北高美術部は、学校側の勧めもあって、絵入の教室を講師とする講習会に参加した。そこで、講師の方がいきなりモノトーンなデッサンを体験、事後の講評会でも講師から作品を激賞されたのであるが、他例となっていた美術部の校内展示でスーパーを発表しようとしたところ、美術教師から待ったがかかり、立腹した彼は校長に直談判に行くも、うまくいかないどころかたしなめられ、「ボクらの校内展示はスーパーを中心とする学校も困るだろう。ちなみに、それら満寿夫の後輩にあたる私は、高校時代、雑活の一環と称して学校の輪転機を使ってスーパー画を印刷、相任中父親に配って歩いていた。印刷するこちら世界史教諭の目撃さえ、「生徒会機関紙」と言って、「池田満寿夫展」の案内状を池田にいての風紀には無関心で「おっ、なかなかうまいなこれ。誰が描いたん？」で終わった。ちなみに、私は球形（笑）

さて、この「学芸会」問題、アート社評の世界にも朝例がある。例えば、川俣正が総合ディレクターを務めた「横浜トリエンナーレ 2005」については、高く評価する声も多かった一方、「学園祭のよう」と批判する意見も少なくなかった。同展で、川俣は「ビスケット・アーティスト入選の立場から、若手や無名の作家、あるいは、ふだん美術の文脈で紹介されない市り手を意識的に起用、市民や学生グループを参加し、人と場に関わりながら、作家と観客の距離を無化しようとふみた。結果、複数の多くの作品が同じスペースに同居することになり、観衆は「多様な表現」という一つの作品の印象よりも、全体のお別り気分を楽しむことが優先された感があることは否めないと言う声も聞こえている。このことは、同展において、観客が観りの作品に向き合い、思索を深めるというよりも遊園の仕方を必要とする「ニュートラル な（ホワイト・キューブ）」の空間が、多くの作品が同居を強いられたことと無関係ではない。その上で、難展は、展覧会を企画することは、意図の有無に関らず政治的な行為であることを、ここに生成される美術的言説の不在にそれが、同展が「学園祭」と揶揄されたと考 疑問であると指摘する（4）。また、90 年代に制作の現場を住居とする芝一たちアトリエ・コロニアリズムやマルチ・ホルチュラリズムといったポストモダン的言説の 歴史化を反省しながらも、例激的で創造的な展覧会を創出するために、企画者はキュレートリアル言説を拒絶してはならないというのが嘆息の結論だ。

とはいったものの、こうした評論は論理的に言えば無意味である。命題「キュレートリアル 言説を生成する（P）ならば、例激的で創造的な展覧会が創出される（Q）」の真理値は、1（0 ∨ 1）が 1 である。したがって、命題「ならば」を「言説を生成する」と改定できても、「例激的で創造的な展覧会が創出される」可能性は残れている。これを反条件法で P に限って Q と判来しない限り、彼女の言明は普遍的なものとはならない。が、部分情報しか知る得ないこと ろでそのように断言するのは、直感的と言わざるを得ない。よって、このような暗に仮定的構造を含む命題において、キュレートリアル言説がなされない形で開催される「学芸会」的な展覧会における制度と創造性の成就と真理値表から排除するのは、P が真 Q が偽である場合のみ、と定義 の制度と創造性の成就と真理値表から排除するのは、P が真 Q が偽である場合のみ、と定義されたならば、それがキュレートリアル言説に基づくものである」と言明するならば、それは後件肯定の誤謬ということになろう。そもそ ゆえに、命題における実践の成立 で成立を確かめるに、「例激」はともかくも、「創造的」ならば、キュレートリアル言説が必要であろう。よってディクルの言葉を借りて、「展覧会 ならば、アートとは何かを範例的に明らかにしなくてはならない。もっとも、これはほとんど空での美術評論について言えることで、本稿も例外ではない。このような状況において、かつてアニティ ・ジャン、ジョン・ゴールディングに対して語った言葉 「アンチ・アートという言葉にはささか悩まされる。というのは、あなたは反対（アンチ）な 貴族（ウォア）より、それは同じものの二つの面であるからだ」（5）が問題となる。

デリダは「物」「作品」「芸術作品」の境界設定が可能なら、あらゆる芸術の本質に対する何ちかの把握（ディ ファ ）が必要であると指摘する（6）。中村大樹氏が「ポストモダンの現代は、と位置づけるこの 機場はイメ ジの氾濫の時代であり、そのメ ジ、すなわち芸術における普遍的な「定義」自体、存在するかどうかもわからないという。「歴史に残ったものの真の芸術」というような、材上換後（基本的に はチェジャンによる定義の部分的 踏襲）の時間不変性を ったとの 芸術の 定義 は（16）。このような企業 の 芸術 、組織と個人 の 芸術 の 関係 を 、アートという制度をめぐる政治的な、そして運の問題に過ぎないからだ。それが出現した時点で「芸術作品」を即座に判断できなければ、公理 で ならない。だとすると、そうした公理をもった美術評論とは何なのか？

評論ようそのは、本稿のように活字となり、多かれ少なかれ、目に見える形となって世間に流布されるものであるが、そこで取り上げられている作品や作家は、ごくごく一部であるにすぎない。われわれは通のために働き、盗のために一コマ、一コマ、一コマ、アート界で最も力をもつ美術記事の一つとして「ニューヨーク・タイムズ」のアート・レビューがある。信濃毎日新聞の「金曜アート」同様に、毎週金曜日に掲載され、人々の注目を集めている。京都大学大学院でメディア史を教える佐藤守弘教授は、講義を先立って「メディアという言葉をすべて一度は広告媒体というように置き換えて考える習慣」（8）をつけよと教える。メディアのもつ特権化された影響力ゆえに、ここでは問題とされるのである。批評も展覧会も、「はじめに見える形で開催しなければ、力をもちえることはできない。逆にいえば、自説を人々に対し見前化させるプロセスこそが、この事態の黒幕なのだ。「天才」が「アブリウの真ん中」で制作を 描いていて誰もその絵を見ないとすれば、そんな天才はいないということになる。「とすれば、何十万という天才たち」、つまり、認められ、尊敬され、栄光をものにするための術を知らなかったが故に自覚し、死んでしまい、消えていく天才たちの存在を考えてみることもできてしまう」（9）。「観客の力によって、初めて絵は絵になる。そうして、ゲルハード・リヒターは自分の作品を、観客に見てもらえるのです。この事実を無視することはできません。私は作品を見る者にも、作品をつくる者と同じだけの責任を与えるのです」（ヴェシャン（9））。その上で、ヴェシャンは流通過程にはまることでアートが現前化するという社会の解析に不快感を表明している。

何をアートとして取り上げるのか？　展覧会や美術をめぐるあらゆる言説は、このような状況の中で自己の解釈を特権化させるべく競起になっている。「ガーディアン」紙のエメリアリン・ヤーバは「アート批評家という 、自分が思ったことをいうとまるで大見栄を切ってるみたいだ」と言っている（10）。このことは自様状況に非難さえもことではない。しかし、メディアの影響力を考えると、その結果は深刻だ。「あるメディア制度が大規模な市場原理を作動させるものであれば、それは大規模な情報収集と検閲を行います。（…）その才能のあれこれについてひとがどう思おうと、あるだた一人の判定者に何らかの場所可能性を与え、「ゆるぎない力骨格を」型の簡単構造は、もはや水銀国難な状況を混沌とさようしている。クリントン政権に参画したロスコフ（アメリカ商務省国際貿易担当副次官）が、グローバル・エリートたちに「もっとも思慮を必要としている者に思慮をもたらし、権力者にさらなる力をあたえ、もっとも弱い者たちのもっとも若し迫った要求さえ無視」（20）している。そのあいまいな状況の中で、「自由」という言葉が、自由放任主義と自由の発源になるものだとすれば、そうしたものに経済・文化・芸術といった人間的営みにさらしただけのシロモノに刺激や創造性を求めることこそ、「自由」という言葉の本来的な意味からすれば、ずいぶんとかけ離れた状態にあるのではないか？　そうなると、ヴェルナーのように「自由は、ただ、ただ、ただ

分枝

branching
http://branching.gr
branching 06 publish : 9.September.2013

夢日記

Masayuki TOKUNAGA 1960-
徳永雅之

1995年9月1日「変わった楽器の夢」

陶器で出来た初めて見る楽器は幅15cmに満たない厚みのない箱のような形。白く、滑らかな表面には植物を表しらった意匠が施されている。上部には箱の幅と同じ高さの立方体が7、8個並んでいてそれを上に引っ張ると和音が出る。立方体は細かワイヤーで本体と繋がっている。左から順に引っ張ると有名なクラシックのフレーズが奏でられるようになっているがある順番で引っ張ると どこかの国の民謡か、大衆歌謡の曲を奏でることが出来る。

2002年4月17日「へんないきもの」

田舎道を歩いていると、道から一メートルほど低くなっている赤土の空き地に変な生き物がいた。巨大なサンショウウオのような色と質感。手足はあるのかないのか解らない、二匹いる。写真を撮った。変だ、変だ。そこに農家のおばあさんがやってきた。おばあさんは赤土の窪みを降りていって生き物になにやら話しかけたと思うと自分の腰をめくりだした。「私がやらにゃ、お腹をすかせるから、こうやって血を あげるのさ」僕に向かってこう言って名前からおばあちゃんはまとわりついた二匹の生き物に血を吸われている。何だか見 てはいけないものを見てしまったような気持ちになり、そこを去った。

2002年10月23日「無題」

何かを探して歩いている。

2007年7月11日「黒い川」

暗い雨が降る日、僕は川越から車を走らせ牢屋に入っていた。がっちりとした鉄の骨格を主とした格子窓を渡る埃には青白い街灯の光が滲んでいた。しばらく走っていたら、なぜか主 川の向こうに行きたくなり、気づいた時には川岸に近いところに立っていた。橋は無かった。ぴたぴたと静寂な大粒の雨の音は絶えになり、言いようの無い音の波とともに僕を囲んでいる。目の前に流れている川は一つの街が囲れるくらいの幅になってしまっていた。普段よりずっと速く街の灯りがこうこうとしていて、橋を飲み込んでしまった黒い川を眺らしていた。僕は指をもぎずにそれをぼんやり見ていたが「ここにいては危ない」と自分の中の声が言ったので車に引き返す事にした。

2008年8月26日「自転車」

晴れ渡った空、山の中腹に白い百合が咲いている。この上まで自転車で走ると遠く綿雲だよ」白い百合が遥白いにぴったり咲いている風景が目に浮かぶ。太陽は少し傾いていてコントラストの強い影が百合を中心とした風景をより美しく見せている。そうだった、うちには自転車が無かったのだと気付く。

2012年5月「貝」

工業系の男子校生に取材をしている。かたつむりとある種の貝の違いについて二人の男子が語りてくれている。それはその貝の殻的を使って小使をする時の話だ。巻き方が微妙に違うので加減を間違えるとあふれてしまうらしい。彼らの先生も間違えて溢れさせたと学生の1人が言った。

2012年12月「質問」

「僕はいつもこうやって問いてるんだけど、この歩き方で正しい？」って誰かに聞いている。

「わかる」ということ

Akiko TOKUTAKE 1955-
徳武安紀子

店入はよく「わかった、わかった」と言いますが、本当に「わかる」ことはめったにありません。

私は今まで三3回あります。いずれも20代でした。今日はそのうちのひとつを書いてみます。

20代の平ばくに、私は小さな人形劇団に一年間いました。

何事にも無駄に表現の強かった私は劇団の上層部に何かにつけて腹を立てていました。今思えば不思議です。

あるとき、都内の幼稚園、保育園に公園のちらしを配るように言われました。渡されたリストは1千ヶ所分

一日に、2ヶ所まわって、後は、お茶にがやっている先輩たちに腹を立てて、「よーし！一日でまわってやろうじゃないか！」

自転車にはどこのチラシを載ていべき出発！！　当然、目は血走り、運転はまるで暴走バイセエコ…

一はたして！とある新聞店の店先の駐車場で、ガリガリリーッと派で言うことをに、大転倒してしまったのです。すり傷ひとつなかったのは、よほどジーンズのおかげだとしても、と振り返れば アー・・！！何と自転車場のコンクリートとタイヤの跡がきれいなアクを描いていてはなりませんか！

「どーしよー！！とにかく、急ぐし、謝らなきゃっ！」

と、見のガラス戸を開けて「ごめんください！」と声をかけました。

すると、広い板の間の真ん中、奥に向かって真っすぐ伸びた廊下の右側奥のドアから若い奥さんが「ハーイとエプロン姿で出てきました。

「早みません！今お店の前で転んで、自転車でガガガーとやっちゃって、コンクリートえぐれちゃったんです！すみません！」

と言って、ペコリと頭を下げました。思る怒る前を上げると、のびっとした奥さんの顔、しばし見つめ合う二人。

するとその時、まっすぐの廊下の右側奥のドアが、パッと開いて「どうしたの？」と一人の男性が、この奥さんのだんあさんらしい。「わかった！」「そうだ、この人に言わなきゃメメがだったんだ」と思った私は再びペコリ「すみません！今お店の前で転んで、自転車でガガガーっとやっちゃってコンクリートえぐれちゃったんです！すみません！」といって思い切りペコリと頭を下げました。

そっまようり初めにドげた頭をおそるおそるあげると、目に映ったのはやはりボンとしただんなさんの顔、と、奥さんの再びボカン顔。

と、と、と、その時、廊下のつきあたりのすりガラスの引き戸がガラガラと開いたのではありませんか！

そして、そのむこうから出てきたのはこれまた体格の見えるからに貫録のある、おかみさん。眼光鋭くまっすぐに、私を見据えています。

「わかった！」「この人とそれ、この店のご主人だ、この人に言わなきゃだめなんだ！」

そこで、私は再び「すみません！今、お店の前で転んで自転車でガガガーっとやっちゃって、コンクリートえぐれ」

まで行ったとき、そうです、まさに、この瞬間！はんの一瞬で！本当に！この瞬から！「わかった！」入ってです。

しっかり聞きったコンクリートが自転車のタイヤや革靴やスタンドどとさで粘土のようにえぐれるわけはない！ということが！

そうです「わかる」ことに時間はかからないのです。

言葉と言葉のコミュニケのような簡潔で十分なのです。

私は先の台詞（もはやう3回目となった同じ謝罪のセリフ）「……コンクリート、えぐれ」に続けて、少しもどどおることなく、こう続けたのです。

「……わかりないですねぇ」

腕を組って、そう言い放つ私の目に映ったのは、更にぽかんとした3人の顔と、やがてゆっくりとうなづく店主の顔。

先を急ぐ私は、詳しい説明をすることなく

「どーもおさわがせしました」と晴れ晴れとお辞儀をして、お店を後にしました。

既に お分かりとは思いますが、一回目と二回目の「わかった！」は正真正銘大主3度目の「わかった」なのでした。そして中と上げるまでもなく、

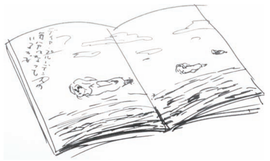
「固まったコンクリートは、そう簡単にえぐれない」

ということだったのです。そうです。

私は人生のかでそう何度も経験できないこの大事なチャンスをコンクリートの固さを知ることに使ってしまったのでした。

徳武安紀子 Akiko Tokutake 1955 生まれ
明治学院大学文学部西洋哲学科卒業 20才で振幅町に転居
料理店アリコーナ勤務現在にいたる。
マリオネット・オペラを主宰指導中開催
欧風菓匠料理アリコ・ルージュ・restaurant haricot rouge
2013年9月～12月ヨアリコ・ルージュ山口にてトポス高地（個展スタイル）
9月 丸山宏太 Genta MARUYAMA
10月 前田敬子 Satoko MAEDA
11月 たかはしJZ Biwa TAKAHASHI
12月 町田哲也 Tetsuya MACHIDA
＊オンザテーブル 9月～ 溝田美人 Yoshito HIROTA
長野県飯綱町川上 2755 飯綱高原 飯綱高原ゴルフコース前
phone 026-253-7551
営業時間 12時～20時 30分
休館・定休日 火曜
http://homepage3.nifty.com/haricot/
http://toposnet.com

翼



2013年4月1日「飛ぶ女の絵」

僕がノートに描いたイラスト、海面すれすれを飛ぶ性の絵で、ページを何枚か使って連続したシーンを描いている。ページの端っこに最近ビートルズは聴かなくなったという友人のI が「ディア・プルーデンスの気分になってるので」という言葉と、僕が描いた女性の少し後に同じように飛んでいる女性が彼によって描き加えられていた。

2011年5月「バイオリン」

友人のミュージシャンN 君の弾くバイオリンのフレーズに重ねるように弾こうとするのだが、演奏するのはろしぶりだったのでついて行くのがやっと。おまけに弦とり弦にべったり付いた粗色の絵の具が照明や体温によって粘度が増し、余計に滑りづらくなってる。後半、詰め込むように音のリズムで弾き始めたら横にいたもう一人の男が「やりすぎ」と目と口の動きでそれを制した。

2011年10月23日「大学生になる」

僕は大学生になっていた。学校は全て木造の古い建物で学生数は多い。広々とした教室に入る。古いガラス窓から町を見下ろせた。もっと近づいて更に下を見下ろすとわちた書物のような質感の不思議な形の建物がある。窓際に長いテーブルが1～2個分並べてあり、そこに様々な資料と思われる本が半分ほどになっているのだがその全てに解がかけてある。授業が始まると、学生達は一斉にその解を少しだけ持ち上げて中のメを取り出した。僕もそれに習って一冊取り出してみた。授業が終わってから職員の女性と立ち話をした。僕のバンドのベーシストの事を彼女は知っていた。彼は世界中にファンがいる有名な詩人なのだと、それを初めて知り驚いている僕に当然のような顔をして語った。

死について

Masato YAMAMOTO 1977-
山本正人

真夏の汗ばむ夜、
子供達の崩壊さが終わり、
ベッドに横になったとき、徐に6歳の長女が言った。

「大きいおじいちゃん、なんで死んだの？」
その質問に私は少しドキッとした。

今年の春に他界した曾祖父の死が、
長女の莉子の心にずっと引っかかっていたようだ。

曾祖父はこれまで、大きな病気も無かったのだが、
ちょっとした小銀行から親れが倒まったのか勝突に掛かり、
そのまま逝ってしまった。
老衰に近いのかもしれない。
しかしながら、約一世紀近くの人生は、大往生だったのではないだろうか。

実をいうと私は、このような質問がいつか子供達から来るかもしれないと思っていた。
それは私が幼い頃、同じように悩んだ記憶があったから。
丁度、莉子くらいの歳頃だったと思う。

当時の幼い私の経験は、
あまり優しいものではなかった。
母に投げかけた "死" についての返答は重く、
その夜、泣き疲れるまで泣いて、すぐには寝付けなかった記憶がある。

私は、姫のこの疑問に
しっかりと向き合わなければいけないと、
隣に横になって話した。

「おじいちゃんは、長く～長く～生きてきて、
莉子よりも、お父さんよりもずっとずーっと長く生きて、
天国に行く、その時が来たんだよ。」
莉子、人は有、誰でもそういう時が来るんだよ。」

私は考えていた。
安心感弾化して言うよりも、
出来るだけ正直に話そうと。
それは私が当時、幼心に人生について考えたことで
今この時がありと感じていたから だ。

「莉子、死ぬのやだもん」

莉子は私の胸に顔を埋めた。
私は、そんな姫の頭を撫でながら出来る限り優しく言った。

「そうだね。でも、おじいちゃんは莉子の何倍も何十倍も何百倍も
ずっとずーっと長く生きて、
楽しかったことも沢山あっただろうし、嬉しいこともたくさんあったろう
うし、
また、少しは悲しいこともあっただろうけど、
それ以上に楽しいことと沢山たくさん人生を十分に生きて、そして天国に
いったんだ。
おじさんだってまだずーっと先。
だからこれからも、莉子もおじさんもお母さんもみんな、ずーっと一緒だ
よ。
莉子はまだまだ沢山たーくさん楽しいこと嬉しいことといっぱいするんだ
よ。
ほら、明日お友達にお手紙渡すんでしょ？何ちゃんだっけ？」

夕飯の時に聞いていた、明日お友達と遊ぶことについて少し話した。
徐々に莉子の顔と声に喜びが戻ってきた。

私は言った。眠りにつけるように。
「莉子の遊んでるとこ、きっとおじいちゃんもお星様になって、笑って
見ているよ。」

「おじいちゃん見てるの？」

「ああ、いつもお空から、みんなのこと見ているんだよ。」

「ふーん。」

「だからほら、もう目を瞑って。
また明日たくさん楽しいことして遊ぶんだから。」

山本正人 Masato Yamamoto 1977-
群馬大学教育学部卒　長野市在住　土木関連業務

ひろこさんへ

Aki-UMEDA 1957-
梅田明雄

今日が離婚の日になることは、もうずいぶん前からの決定事項でしたが、
やはり当日の朝となると、平常心というわけにはいきませんでした。
もう、別居生活も6年近くになるので、
法律上今まで大変であってもずっと独身者のような暮らしで、離婚が成
立したというよりも
明日から特に生活自体何も変わらないのですが、人間とは不思議な生き
物ですね。
本日調停で合意した金額、支払い期間はひろこさんにとって、
とても充分満足のいくものであることは重々承知しております。
しかし、私にとっては非常に大きい負担だということも理解いただける
と思います。
お別れをきちんと果たすよう最大の努力をするつもりです。
今あらめて年月を数えてみると、あなたと結婚して27年にもなります。

２７年前に結婚して今日離婚するまで、
ひろこさんとは正直、考えての違うこともありましたが、
楽しい事、嬉しかった事も本当にたくさんあり、
総合的にみると素晴らしい時間だったなあと感じます。
ひろこさんが私の奥さんでいてくれたおかげだと心から感謝しています。
そして今、時々さみしいと感じることもありますが、
こうして大好きな仕事して、好き勝手な事をして、
とても幸せだなあと感じる時間を過ごしていられます。
これもまた、ひろこさんの存在があったからこそと思います。
人生終えるまで一緒にいられなかったのは残念ですが、
ひろこさんには、これからもっともっと幸せになって欲しいと心から
願っています。
そして、偶然どこかでばったり会った時は、笑顔で「こんにちは」を
言えたらいいなと思っています。
今まで、ありがとうございました。健康には充分気を付けて下さい。

平成25年8月27日　明雄

梅田明雄 Akio Umeda 1957 年愛知県豊田市生まれ
長野県千曲市在住
梅田陶園工房主催
http://o55.jp
https://www.facebook.com/akio.umeda

photo by Sayoko FUNABASHI

窓

Sayoko FUNABASHI 1966-
船橋小夜子

自宅のアパートはベッド付近に小さな窓があり、隣は家の壁なので光、
横になると ちょうどその窓から空だけが見える。
晴れていると、月が顔を覗かせる。
一日の終わりに嬉しい瞬間だ。
疲れてだらけ切の頭でぼんやりと思う。キレイだな。
今は暖りて、グレー1色の抽象絵画。の予定が偶然にも雲間からこ
ぼれたぼんやりとした月が現れた。

窓は絵画なのか、絵画は窓なのか。雲見陣子って素晴らしい文化だな。
自宅にはないけれど。生活の中の美とはこういうことか。
と、ふわふわ思いながら、寝ながら鑑賞という贅沢を満喫する。

広大な空を決められていつもの一枠で切り取る（しかないのだが）。
動かせない絵画は、ゆったり変化するが、こちらの意思は反映されない。
カーテンやデコレーションはできても、あくまで主導権は窓である。
額縁が小さいほどその恐怖はじわじわと増幅して枠く。人が作ったも
のなのに、手を加えることができない、もどかしさにも似た無念。

今日も映像作品を見ながら、いつの間にか夢の中に入る。

船橋小夜子 Sayoko Funabashi
クリエイター
1984 青森県八戸市生まれ
2009 弟沢デザイン研究所 卒業
モバイルサイトデザインを経て現在フリー
ホームページ http://www.sayoshi.com
ブログ http://www.sayoshi.com/blog
ブログ http://www.sayoshi.com/blog/category/diary
ブログ http://www.sayoshi.com/blog/category/illustration
ブログ http://www.sayoshi.com/blog/category/photo
ブログ http://www.sayoshi.com/blog/category/movie
ブログ http://www.sayoshi.com/blog/category/other
ブログ http://www.sayoshi.com/blog/category/diary/feed/
ブログ http://www.sayoshi.com/blog/category/illustration/feed/
ブログ http://www.sayoshi.com/blog/category/photo/feed/
ブログ http://www.sayoshi.com/blog/category/movie/feed/
ブログ http://www.sayoshi.com/blog/category/other/feed/